

巻頭インタビュー

アメリカンダンスの普及に努める「JSDC」主宰
ヨシ矢野さん

取材
宮 淑子

『Shall we Dance?』に描かれたダンスはアメリカンスタイルのダンスですね

競技ダンスは初心者には難しすぎますね

ハリウッド版「シャル・ウィ・ダンス？」が、四月二十三日から全国東宝洋画系で封切される。仕事も家庭も順調な中年男性に押し寄せる漠然とした不安・不調（ミッドライフクライシスと言われる）を、ダンスと出逢って乗り切ろうとするストーリーは、ハリウッド版も同じだが、リチャード・ギア（弁護士）とジェニファー・ロペス（ダンス教師）が演じる踊りは、競技ダンスだけでなく、アメリカンスタイルのダンスをふんだんに取り入れたものになっている。そこで、二十三年間のアメリカ在住中に様々なミュージカル劇団やアメリカで唯一のベアダンス舞踊団「アメリカンボールルームシアター」に所属し、二年前に帰国したダンサーで、振り付け師、そして自らが主宰する「ジャパンソーシャルダンスクラブ（JSDC）」のダンス講師のヨシ矢野さんに、アメリカンダンスの魅力についてお聞きした。矢野さんは、日本で、「誰でも、どんな場所でも、気軽に楽しく踊れるアメリカンダンス」の普及や結婚披露宴のブライダルダンスを広めようとしており、さしずめ、「ダンス界の革命児」と言ってもいい方だった。

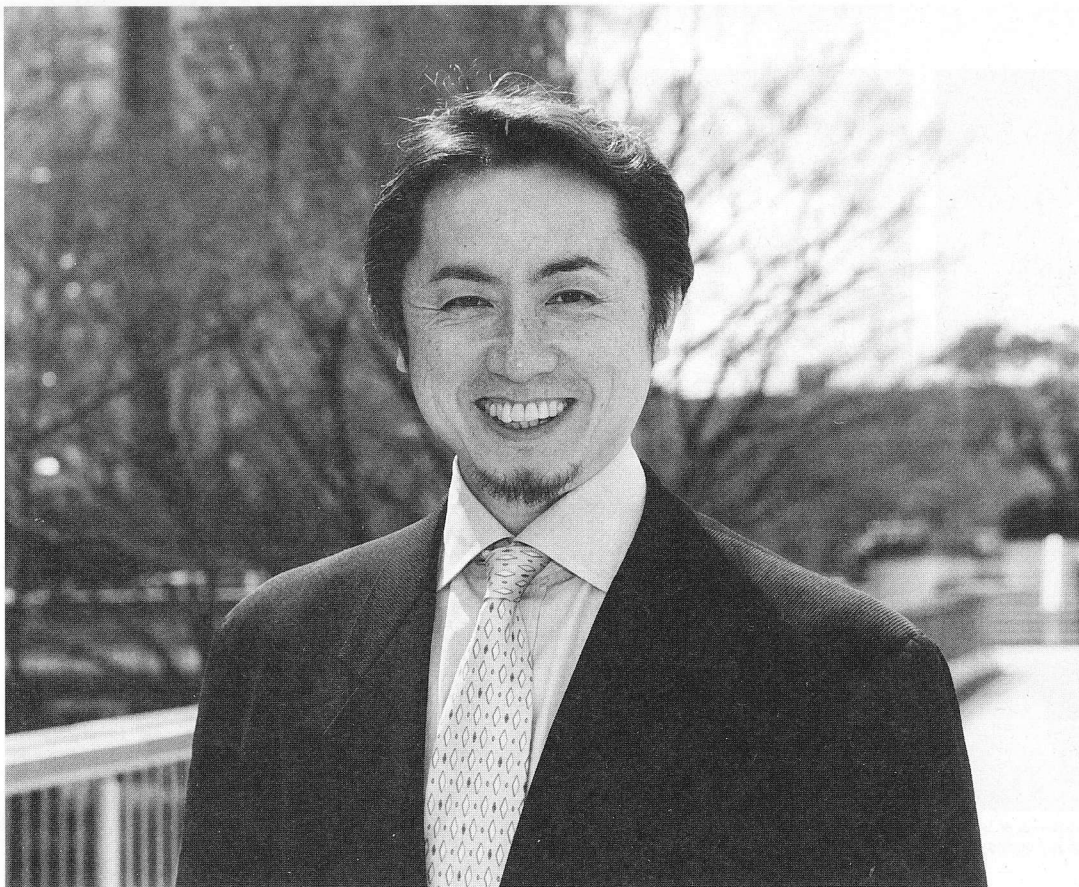
ハリウッド版を既にご覧になったと思いますが、日本版と比べてどのよ

うな感想をお持ちになりましたか？

「まず、ハリウッド版を日本版とあまり比べない方がいいと思います。話の流れこそ似ていますが、それぞれの文化や人の気質に合わせて演出を工夫しているのだから、それぞれの面白さがあります。例えば、アメリカは夫婦単位の行動が基本ですから、夫婦の行動パターン、愛情表現、夫婦でダンスを踊ることに対する考えなどはかなり日本と違います。ダンスに関しては、日本版は競技スタイルひと筋で描いていますが、アメリカ版は競技スタイルだけではなく、アメリカンダンス、マンボ（サルサ）、クラブスタイル、そしてアルゼンチンタンゴ（バンド名ゴータンプロジェクト）の曲によるショースタイルのダンスを取り入れています。主人公がスタジオに入会するシーンで行われているレッスンは、アメリカンスタイルのタンゴです。講師が、カウントする時も『スロー・スロー・クイック・クイック・スロー』の代わりに『T（テイ）、A（エイ）、NGO（エヌ・ジー・オー）』といった具合です。私がニューヨークで学んだ方法で、今も私が教えている方法です（笑）。また、マンボ（サルサ）のレッスンシーンでは、日本版のようにステップだけを懸命に覚えようとするのではなく、リチャード・ギアを含む生徒達は、ラテンの雰囲気を出しながら音楽に合わせてノリノリで踊る、アメリカンスタイルならではの場面も見られます」

——そんな、映画にも描かれていたアメリカンスタイルのダンスについて、詳しく聞かせて下さい。

「アメリカでは、社交ダンスをはじめ人は誰でもアメリカンスタイルから入ります。アメリカンスタイルは、別名アメリカンソーシャルとも呼ばれ、



撮影：西田 敦